

# 大阪は踊る!

高遠響 Hibiki Takatoh



アルファポリス文庫

もくじ

第一章	全ては道頓堀から始まった	5
第二章	黒い影	71
第三章	どんどん行くでえ!	121
第四章	道頓堀の変	167
第五章	大阪春の陣!	281
第六章	血戦	347
第七章	道頓堀に日が昇る	443

第一章 全ては道頓堀から始まった

二〇一×年。

ここは大阪、道頓堀。コテコテの大阪の象徴、ソースたつぷりのお好み焼きのような街である。

巨大なグリコの看板や大きなカニのロボットがお出迎えしてくれるこの通りは、いつもアルコールがしこたま入ったオッサンの集団や、光物のついたアニマル柄のビビッドなファッションのオバサマ達、デートやコンパで浮かれている若者達で賑わっている。あちこちで粉モンの焼ける匂いが漂い、ガチャガチャした騒音と喧騒で満ち溢れているこの界限だが、今日は一段と騒々しい、いやほとんどお祭り騒ぎといった様子になっていた。

道頓堀に向かって走っている心齋橋筋や戎橋筋えびすばしにも、その周辺にある宗右衛門町そうえもんちやうや法善寺横丁などにも週末の夜の二倍はあろうかという人が溢れていた。その人の群れは皆ある一箇所に向けて流れているようだった。

空にはヘリコプターが一機、二機、バタバタと腹に響くような爆音を立てながらミナミ上空を何度も旋回している。

「えらい人やなあ」

「これ、皆テレビみたんやろか？」

「阪神優勝したみたいない騒ぎやな」

「阪神いうたら、今年は調子ええやないか。このまま行ったら優勝やな」

「まだ四月やないの、そのうち息切れするで」

空からの騒音にかき消されないように人々が大声で会話を交わしている。その人混みを目当てに通りの店からは客寄せの声がかかる。

「道頓堀弁当、いかがですか。立ったままでも食べられるよ」

「たこ焼き買ってや」

甲子園のかちわりの売り子よろしく、首からたこ焼きのバックを山盛りに積んだケースをぶらさげて、オネエチャンが人ごみを縫うようにして歩き回っている。

耳がおかしくなりそうな騒々しさ。まったく異常なまでの盛り上がりだ。

人々の群れの向かう先はどうやら、道頓堀にかかっている戎橋（通称ひっかけ橋）のようだ。橋の上には信じられないような数の人が押しかけ、それがまた揃って欄干に貼り付いて道頓堀を覗き込んでいた。

「あれか？ あれがそうなんか？」

「うわあ、ホンマやったんや。凄いなあ」

「すげー！ わあ、噴水みたいになってるで」

「くっさー！ めちゃめちゃ油くさいやんけ！ たまらんわ」

「川、真つ黒やんか。凄い量やな、これ」

「おい！ お前！ ここは火気厳禁や！ 煙草吸うな！ わしらを焼肉にする気か」

橋から川を覗き込む人々の顔には驚きと興奮が満ち溢れていた。こんな事が実際にあるなんて、まさに事実は小説より奇なり。さあ、これからオモロイ事はじまるでえ……。誰もが心の中でそう思っているに違いなかった。

「はあああ！ 十分経ちましたー！ 次のグループと交替です。速やかに橋から出てく  
ださい！ お出口はこちらー！」

阪神タイガースの黄色いハッピーを着た地元商店街のおじさんが、ハンドメガホンをガーガー言わせながら叫んでいる。よく見ると橋の入口にも中ほどにも出口にも黄色いハッピーの人間が黄色いメガホンを持って人員整理をしていた。

促された人々は名残おしそうに振り返りながら、興奮した面持ちで声高に喋りながら移動していき、入れ替わりに心斎橋側の橋のたもとから、新しい集団が入ってくる。

「はい、一回十分、百円やで！ もっかい見る人はぐるっと回って、並びなおしてやー！  
待ち時間？ あー、待ち時間は三時間やでー！」

黄色いハッピーのおじさんが商店街で鍛えた喉を鳴らしている。

橋の中央に立っていたハッピー姿の前田拓郎は呆然としながら、熱気むんむんの人の群れ

を眺めていた。真面目そうで気の良さそうなこの青年は、商店街の人々とは少し違うおどおどしたような表情を浮かべ、ほとんど棒立ちになっていた。朝からずつとここで立たされているので、もう疲れも限界だ。ただでさえ猫背気味なのに、ますます縮んでしまいうだった。疲れた頭には目の前の光景がまるで夢の中のそのように見える。それもどちらかと言うと、悪夢。好奇心で目をぎらぎらさせた民衆の顔、顔、顔。頭がくらくらしくる。

「前田さん、交替です。休憩してきて下さい」

橋の向こうから同じように黄色いハッピを着た若い男が走ってきた。はっと我に返り、拓郎は声の方を見た。商店街の乾物屋の息子だ。

「たこつぼの小路さんが呼んでましたよ。まかない出来ましたって」

「はい」

拓郎は自分より少し若い青年に丁寧な頭を下げた。

「しかし、凄いことになりましたね」

「まったく」

拓郎は困ったような顔をして溜息をついた。

「こんなお祭り騒ぎになっても……。どないしよう」

「ええやないですか」

青年は快活な笑みを浮かべた。

「これから一儲け、二儲けしまっせ！ 神さんがくれたプレゼントや。道頓堀から石油が湧くなんて！ こんなアホな話、聞いた事もないわ。そら、オモロイ事になりまっせ！」

「オモロイって。そんな、無責任な……」

道頓堀に石油が湧く。そう、そんなアホな話があるわけない。これはきつと夢だ。拓郎は自分のほったたをつねつてみた。この三日間、何度もつねつてはいるのだが、どうもこの夢から逃れることが出来ないのだ。

橋の上から道頓堀を見れば、普段どんよりと濁った緑色の川面は真つ黒のてらてら光る原油ですっかり覆われている。ごぼごぼと湧き上がる原油の吹き出し口を見ていると、ゴジラかなにか得体の知れない怪獣がぬうつとでてくるような気がして、お尻の辺りがもぞもぞしてくる。

ありえない現実ですっかり取り残されている拓郎とは対照的に、目の前の青年はららんと目を輝かせ、生き生きと走り回っている。そういえば、昨日の晩も商店街の寄り合いで興奮気味に働いていた。そうだ、祭りの時にはこんな目をした男達をたくさん見る。今はこの界隈の全ての人々が祭りの目をしていた。アドレナリンでペロペロに酔っ払っているようなものだ。

「早く行ってくださいよ。小路さんイラチャから、もたもたしてたらドヤされまっせ」

「あ、はい」

拓郎は青年に背中を押され、慌てて走り出した。

拓郎は人混みをかき分けて、川沿いの道を急ぐ。道頓堀沿いの一角に目的地であるたこ焼き屋「たこつぼ」があった。古びた木造の狭い間口はなかなか風情がある。昭和の匂いがした。

建付けの悪い引き戸をがたがた言わせながら開けると、中からやたら明るく白い光が溢れ、思わず拓郎は顔をしかめた。

「おかえりなさい！ あの子がそうですわ」

店の主である小路やすえが飛んできた。

「拓郎くん、はよ入って！」

拓郎の腕をぐいぐい引つ張る。

「な、なんですか？ わあっ？」

拓郎の目の前には大きなカメラを肩から担いだカメラマンや、長い棒の先に掃除のモップのような大きなマイクをぶら下げた音声さん、ハロゲンライトを構えた照明さん、そしてハンドマイクを手にした美人のテレビリポーターが待ち構えていた。

「なんなんですか！ この騒ぎは？」

拓郎は思わず悲鳴を上げた。

「いいからいいから」

やすえが拓郎をぐいぐいひっぱり、傍のテーブルに追いやった。そこには既に先客が座っている。同僚の山本華子と、上司の広瀬康夫だった。

「おう、拓郎遅かったな」

「皆だいぶ前からスタンバってたんですよ」

二人からかわるがわる声をかけられる。

目の前で展開している事態が飲み込めなくて、拓郎の頭は真っ白になった。

「これで全員ですわ」

広瀬が頭を掻きながら答える。痩せぎすの黒縁眼鏡のこの男は信じたくないが拓郎の上司であり、大阪市役所のれっきとした公務員である。それも一応課長ときたものだ。普段からやる気のない、妙にへらへらしたいい加減なオッサンのだが、今日のような非常事態でもやはりいつも通りのマイペースぶりである。それでも少し尻尻が下がっているというか鼻の下がやけに長いのは、目の前のリポーターが美人だからだろう。五十もだいぶ過ぎていてというのに困ったものである。

「それでは、これからお話を伺いますので宜しくお願い致します。皆さんの所属をお伺いしてから、今回のこの騒ぎについて色々お聞きますね」

「あの、これって、生放送なんですか？」

拓郎の隣に座っている華子が上ずった声で聞いた。普段は白いぼによぼによの頬つべたが興奮のためか紅潮している。白いマシユマロがイチゴのマシユマロに変身したような感

じだ。  
「いえ、録画ですよ。失敗しても大丈夫ですから。もし放送して差し支えあるようなところは後でカットするのでご心配なく」

録画？ カット？ 拓郎はまだ取り残されている。

「前田さん、何かご質問は？」

美人リポーターが艶やかな笑顔を拓郎に向けた。拓郎はぼーっとその笑顔に見とれる。どこかで見た事のある顔だ。

「前田さん？」

美人リポーターに覗き込まれ、はっと我に返った。

「質問と言われても……。そや、これは一体何の騒ぎなんですか！」

拓郎は広瀬に噛み付いた。広瀬は莫迦にしたような目つきで拓郎を見る。

「何のつて、見たらわかるやろ。取材やないか。それもテレビやで、夕方のニュース」

広瀬はにやにや笑いながら答えた。その言葉を華子が引き受ける。

「ついでにそのまま『ニュース11PM』ですよお！ 全国放送やないですかあ！」

華子はおひよひよと、変な声で笑った。拓郎はぼっかりと口を開けて一瞬気絶しそうになったが、次の瞬間には広瀬に噛み付いた。

「何をアホな事してるんですか！ 取材受ける場合やないでしょう！ 橋の監視、僕に押し付けて今まで何してはったんですか、全くもう！」

そして広瀬の耳元で声を落として抗議する。

「だいたいエエんですか？ 市役所は知ってるんですか？ そもそも極秘って！ うぐぐぐ」

横から伸びて来た華子の手が拓郎の口をすかさず塞いだ。広瀬は耳の穴に指を突っ込んでわざとらしく顔をしかめてみせた。

「うるさいやつちやな、ホンマに。ほな、始めましょか」

広瀬は眼鏡をちよつと動かすと、目の前の美人リポーターに気づいた視線を送った。あっけに取られて三人のやり取りを見ていた美人リポーターが、はっと我に返る。

「あ、そ、そうですか？ じゃ、行きますね」

リポーターは振り返るとカメラマンに合図を送った。カメラに小さな赤いランプが点り、カメラが回り始めた。

拓郎が結局何が何だかさっぱりついていけないままに取材は終わり、三人は自分達の勤務先である大阪市役所に戻った。既に夕方、五時を過ぎている。

いつもなら定時を過ぎた役所の玄関は無愛想に閉ざされており、人の出入りも途絶えているのだが、今日はいつもと違い、まだ玄関のガラスの扉は施錠されていなかった。中に入るとざわざわと人の動き回る気配が満ち溢れている。窓口の奥からはひっきりなしに電話のコールが聞こえてくる。どの課も今日は残業間違いなしだ。

待合ロビーには苛立ちと疲れでどよよんとした表情の市民がまだ数十人、腰をかけて

いた。

「どこもかしこも忙しそうですね。やあ、大変大変」

華子が小声で言う。まるで他人事な口調に、拓郎は眉をひそめた。普通は大変なんだよ、普通は。

「商売繁盛でよろしいな」

広瀬がけけつと笑う。妙に楽しそうだ。この男に至ってはどうしようもない。拓郎はくらくらしてきた。

三人は待合ロビーを通り抜け階段へと向かい、下り始める。

玄関とは対照的に<sup>どけ</sup>人気の無い地下、市役所の最下層である地下四階の廊下に足音を響かせながら、三人は自分達の部屋の前に辿り着いた。重々しい白い扉の前にはプラスチックの安物臭い札が貼り付けられている。そこにはへたくそな文字で「どないしよう課」と書かれてあった。

三人は部屋に入った。

扉の前には来客用のカウンターが置かれてあり、招き猫と福助とビリケンさんの置物が並んでいる。

その向こうには事務机が三つ向かい合わせに並べられていた。まるで小学校の給食グループのようだ。一番奥が課長席、手前の二つが拓郎と華子の席である。

デスクの周りの壁にはスチールの棚がびっしり並んでいて、キングファイルが押し込ま

れていた。そもそもこの部屋は資料室だったらしい。

「もうじき六時や。ニュース、ニュース」

華子はウキウキした様子で広瀬の席に着くと、閉じてあったノートパソコンを開け、テレビをつけた。

「こら、華子！ 俺のノートパソコン、勝手に触るなよ」

広瀬が横目で華子を睨む。

「ええやないですか、減るモンやなし」

「いや、減る。キーボードが磨り減る」

広瀬と華子の親子漫才のような会話を聞いているとドツと疲れが増してくる。拓郎は大きく溜息をつくと自分の席に座った。一日中道頓堀で駆け回っていたので、足はパンパンに張っている。その上、異様なテンションの見物客の監視で神経も相当磨り減っていた。そしてトドメはテレビの取材と来たもんだ。心身共にボロボロだった。

「拓郎くん、お疲れですね。いつも情けない顔してるけど、より一層情けない顔になりますよ」

広瀬のからかいにむっとして拓郎はぼそぼそと言り返す。

「大きなお世話ですよ。どうせいつも困った顔してますよ、僕は。だいたい、課長のせいですからね。いいんですか？ テレビのインタビューなんか受けて。また上からどやされますよ？」

「相変わらず真面目やね、拓郎くんは」  
華子が能気な調子で茶々を入れる。

「そんな硬いことばっか言うてるから、もてへんねん。もうちょっと柔らかく、洒落のわかる男でないとなあ」

「やかましわ」

この二人と話していると頭痛がしてくる。

ノートパソコンに映し出されたテレビ画面から夕方のニュースのテーマが流れてきた。

「お、始まった始まった」

華子が嬉しそうに手招きをする。広瀬はにやにやしながら、拓郎はしぶしぶ腰を上げ、華子の傍に移動した。

ニュースは現在の道頓堀のリポートから始まった。さっきの美人リポーターが映る。

「あ、この人。麻生直美やったんや」

拓郎は初めて先ほどのリポーターの名前を思い出した。さっきはドタバタしていて全く気が付かなかった。大阪にあるテレビ局の人気女子アナウンサー麻生直美である。すらりとした長身に、長い黒髪。凛とした眉にちよつと甘めの口元。しっかりしていそうで、それでいて愛嬌を感じさせる雰囲気。人気の理由だった。ローカルのバラエティー番組ではよく見かけるおなじみの顔だ。司会のお笑いタレントに突っ込まれて、真面目に受け答え

する天然ぶりが可愛らしい。拓郎も彼女の出演する番組はよく見ていた。実物の彼女はテレビで見るとよりも更にスレンダーで綺麗だったなあ、とニヤける。拓郎のストライクゾーンど真ん中！ といった感じだった。ちらりと隣の華子を見る。

「……同じ人類とは思えん」

「は？ なんですか？？」

「いえ、別に」

テレビの画面にちんまりした中年の女性、小路やすえが映った。

「お、第一発見者の登場や」

麻生のインタビューに答える形で、やすえは事の次第を興奮した面持ちで語り始める。テレビを見ながら拓郎はこの四日間を思い起こしていた。

騒ぎの発端は四日前の夜中の出来事である。大阪市中央区の地下を震源とする震度五弱の地震が起きた。建造物や道路に損傷が生じた場所もあったが、死者はゼロ。軽傷者が数名出たものの、惨事に至らなかつたのは幸이었다。天満にある拓郎のボロアパートも倒壊することなく、被害と言えばミドリガメの「由美子」の水槽が危うく机の上から落ちかけたくらいだった。

翠朝、拓郎の職場、中之島にある大阪市役所ではまだ早朝、始業前にもかかわらずバケツをひっくり返したような大騒ぎで情報収集や市民の対応に追われていた。市役所内も地

震の影響で棚がこけたりしていたので、その後片付けで大わらわだった。普段はお暇などないし、もう課も壁際の棚からファイルがごっそり落ちていて、三人は一日がかりで片付けるハメになった。

これで終わってれば、何の問題もなかったのだが……。

三人がファイル整理をしている最中、小路やすえが市役所を訪れていた。やすえは道頓堀界隈の「たこつぼ」という老舗のたこ焼き屋の女店主だ。顔役でもある彼女が道頓堀の商店街を代表してやってきたのだった。

「道頓堀から、なんやくっさい黒いモンが流れ出てるんですよ！　なんとかしてよ！」

もつともそんな訴えはそれこそ山ほど市役所に届いていたので、やすえはたらい回しにされ、最終的に辿り着いたのが拓郎、広瀬、華子の所属する「どないしよう課」だった。絵に描いたようなお役所仕事に怒り心頭のやすえに引きずられるようにして三人は道頓堀にやって来た。そこでは異様な光景が展開していたのである。

ひっかけ橋の少し川上の、道頓堀川のと真ん中から、黒い液体が噴水のように噴き出していた。下水や地下水の類なぐいでない事は誰の目にも明らかだった。粘った感じと、えも言われぬ強烈な悪臭——強いて言うならば油の臭いと卵の腐ったような硫黄の臭い——に、さすがの三人も只事でないと感じた。珍しく慌てた三人が市役所の危機管理室に連絡をし、危機管理室がようやく重い腰を上げたというのが今回の騒動のあらましである。

「そらすごい剣幕で怒鳴り込んできたもんな、小路さん」

広瀬がニヤニヤ笑う。テレビ画面に映る小路さんは可愛らしい中年のおばちゃんだが、三日前に飛び込んできた時の鬼のような形相を思い出すと思わず身がすくむ。大阪のおばちゃんを怒らせると怖いという事を思い知らされたような気分だ。自分よりも頭一つ分は大きい拓郎の胸倉を掴み、大阪弁でまくしたてられて、拓郎は思わず気絶しそうになったのだ。

テレビではやすえの身振り手振り付きの熱いトークも終盤にさしかかっていた。

「お、いよいよやでえ！」

三人は思わず身を乗り出した。画面は切り替わり、広瀬のアップが映る。

「でたあああ！」

妙な歓声を上げる三人。

「うーわ、どないしよう。テレビデビューや。スカウトされたらどないしよう」

華子がきゃっきゃとはしゃぐ。お前をスカウトするのは吉本くらいや、と拓郎は心の中で突っ込んだ。

テレビの中で広瀬と華子がかかるがわる登場しては、道頓堀の石油流出についての経緯を喋りまくっている。

「あゝあ、こんなモン放送してしても……。僕、知らんもんね」

拓郎は絶望的な気分で見送をついた。その横で広瀬はにやにやしているし、華子は能天

気にはしゃいでいる。

その時、広瀬の机の上の電話が鳴った。

「課長！ 内線！」

「拓郎出て」

拓郎は仕方なく電話を取った。

「はい、どないしよう課」

「こらあ！ お前ら！ 何考えとんねん！」

受話器から耳をつんざくような大音量で罵声ばせいが飛び出してくる。拓郎は思わず受話器を耳から離れた。

「この件はしばらくは極秘やと言われたトコやろうが！ ちよつと上がって来い！ 三人共や！」

「あの、どちらへ行けば……」

「市長室や！ はよ来い！ わかったな！」

耳に当てなくても充分に内容が聞き取れるような勢いでまくし立てると、一方的に電話は切れた。

「ほら、ね〜」

拓郎は受話器を置くと広瀬を横目で見た。広瀬はあさつての方を向き口笛を吹き始める。まったく人を莫迦にするにもほどがある……。

三人は連れ立って市長室へと上がっていった。地獄の底のどないしよう課とは違い、市長室は天界にあるようなものだった。大きな窓からは中之島の豊かな水と緑が一望出来る。派手でガチャガチャしたイメージばかりが先行しがちだが、大阪は昔から水の都として有名だったのだ。夕暮れに包まれた大阪の街はそれなりに風情があつて美しいものである。

拓郎は窓の外を眺めながら歩いた。これから大目玉を食らいにくのである。タコ頭の市長になじられて、小さくへこんでいく自分の姿を想像すると、このまま回れ右して帰りたい。

「ああああ、ホンマについてない人生や……」

拓郎はがっくりと肩を落としてしょぼくれた。

そんな拓郎とは対照的に二人はまだ浮かれた調子で先ほどのテレビの話で盛り上がっていた。

「あれ、夜も流れるんですよね」

「おお、勿論や。録画しとかなアカンなあ」

「課長！ 何をのん気な事、言うてるんですか！ これからどんなお仕置きが待ってるか……、課長のせいですからね！ それに録画って。それって赤っ恥の永久保存って事ですよ？ ホンマにエエ加減にしてください！」

拓郎は思わずいいいいとなつて突っ込んだが、広瀬は知らん振りをしてさっさと歩

いていく。

「男のヒステリーは格好悪いで、拓郎」

「おお、嫌だ嫌だ」

華子がセレブの奥様口調で横目で拓郎を見た。拓郎はその場に崩れ落ちそうになった。この二人にはとてもついて行けない。

「とほほ……。もう嫌、こんな生活」

市長室の前に辿り着く。拓郎は緊張して思わず身震いしたが、広瀬はノックを三回すると返事も待たずにがばつと扉を開けた。まるでトイレの扉だ。

「待ってましたよ。どないしよう課の皆さん」

三人の真正面には豪華なマホガニーの机に埋もれるように座る市長、館山修と、その両脇で助さん格さんのように控えている二人の男、危機管理室の芝と都市整備室の岸本が立っていた。

「まあ、入りなさい」

てかてか光る頭を擦りながら館山は三人を手招きした。三人は中に入ると、机の前に整列した。

館山が机の上に両肘をつき、手を組みながら三人を順に見る。顔には愛想笑いが貼り付いていたが、頬がピクピクしているところを見るとかなりおかんむりのようだった。

「君達が道頓堀の市民の皆さんの事を親身に思ってお手伝いしてくれているというのは素

晴らしいことだと思いますよ。第一発見者との橋渡しをしてくださっているというのも感謝している。そして君達が動いてくれた事で、早急な調査にかかれたことも」

そう、その通りとばかりに華子がふんぞりかえり、広瀬が面倒くさそうに顎をぼりぼりと掻いた。館山のはげ頭にわずかな赤みが差すのが見え、拓郎は冷汗をかきながらオロオロする。

「しかし、私は昨日の朝、朝礼で言ったはずですよ。道頓堀に石油が湧いている事は当面の間、他言無用であると。今後、どういう風に活用していくか、それが決まるまでは極秘である」と

「そうだったっけ？」

華子が拓郎を見上げた。拓郎は眉を八の字にして華子を見た。

「にもかかわらず、昨日のうちにニュースですっぽ抜かれ、今日のあの騒ぎ……。そして、事もあろうにインタビュに顔を出して答え、市役所職員である事までばらし……」

館山がぶるぶると震えながらうつむいた。

「市長、だいじょぶですか？」

広瀬が身体をかがめて覗き込む。

「君達には公務員としての自覚というものがないのかね！」

ドカーンと噴煙が上がりそうな勢いで館山は顔を上げ、机を両手ではんつと叩いた。さすがの三人も思わずちよつと後ろに引く。

「市長、あんまり怒ると血管が切れますよ」

隣に立っていた岸本が慌てて館山をなだめた。反対側に立っていた危機管理室の芝が三人を睨み付ける。四角い、鬼瓦のようなご面相がますます恐ろしく見え、拓郎は生きた心地もしなかつた。蛇にいらまれた蛙とはまさにこの事だろう。

芝はどすの利いた声で唸るように言う。

「どうせ放送局に最初にリークしたのもお前らとちやうんか？ ……まったく、どないしようもない奴らやな、お前らは」

「そりゃ、まあ、どないしよう課ですから、ねえ」

広瀬がにやりと笑い、挑戦的な目で芝を見る。バチバチと激しい火花が散った。

そもそも「どないしよう課」というのは役所内でも幻の課である。広報にも載っていないので、その存在を知っているのは役所の人間、それも実態を知っているのは課長クラス以上のみという曰く付きの課だ。

その課長を務めているのが広瀬である。そして課員は拓郎と華子の二人きり。三人とも伝説的な失態をやらかして、島流しにされてきた。

広瀬は入職した当初、相当の切れ者としてブイブイ言わせていたが、性格的に少々問題があつたらしい。拓郎が見る限り、協調性の無さとか、超マイペースな言動が上司の逆鱗げきりんに触れるのも仕方ないという感はある。なにやらとんでもない事態を引き起こしたと

も、幹部にいらまれたとも言われているが、結局出世街道から引きずり下ろされた。当時の幹部としては出来れば市役所から追い出したかったらしいのだが、民間と違ってクビにも出来ず、止むをえず受け皿としてどないしよう課が作られたという事だ。そういう訳だから、ある意味、この課は彼の帝国なのである。ちなみにその「とんでもない事態」については本人が固く口を閉ざしているので不明であるが、その当時を知っている上の方の人間にはいまだに敬遠されているところを見ると、相当な事をやらかしたのだろう。

華子はまだ二十五歳と若い。三年前にこの課に飛ばされてきた。中学生と見間違ひするような童顔にショートヘアといういでたちからは想像できないが、時々びっくりするような柄の悪さを発揮する。聞くところによると、酒の席でセクハラに及んだ某有力府会議員を罵倒した挙句、タコ殴りにしたと言う事だ。それが原因で遠島となった。

拓郎は半年前に総務課からここへ飛ばされた。拓郎は今年三十歳になる。三十歳と言えば、そろそろ中堅として重要な仕事を任されるような年齢だ。拓郎も例外ではない。それはそれでいいのだが、とある重大な秘密を引き継いだ。それは拓郎の想定外の仕事だった。総務課で長年かけて築き上げた巨額の裏金である。大人しくて真面目な性格が買われて、その管理を任されたのだ。

上司の予想はある意味大当たりであり、大ハズレでもあつた。拓郎の真面目さは並外れていて、内部調査に入った調査員に自ら裏金の存在をばらしてしまうという暴挙に出たのだ。良心の呵責に耐えかねたと言えば聞こえはいいが、自分が作つた訳でもない裏金を隠

し持っているという事実には拓郎の心臓が耐えられなかったのである。

当然マスコミにもすぐにばれ、大騒動になった。報道に拓郎の名前が出ることはなかったが、それでも市役所内では「どうやら前田がちくちくたらしい」と囁かれ、同僚の冷たい視線にどうしようもなく居心地の悪い思いを味わった。そして更に理不尽な処遇が拓郎を待ち構えていたのである。長年の不正を暴いた正義のヒーローとして祭り上げられるのかと思いきや、機密を漏らした裏切り者として血祭りに上げられ、上司と前任者と共に処分の対象になってしまった。勿論、理由が理由だけにクビにはならなかったがどうしよう課へ更迭されるハメになったのである。なんとも納得のいかない処遇ではあったが、針のムシロに座り続けるくらいならいつそ退職しようかと思っていた矢先だったので、拓郎にとってはむしろラッキーだったのかもしれない。待つてましたとばかりに荷物をまとめて地下のどないしよう課へと異動した。

そんな課だけに、普段の仕事も「どないしようもない」ようなものばかりだ。ブラックリストに載っているようなクレーマーがやって来た時のお茶だしとか、市民参加のイベントでの迷子の子守とか、職員を自分の召使と思っているような議員の雑用の片付けとか、普通の公務員なら絶対やりたくないであろう仕事回ってくる。

そういう訳だから、地震直後の混乱の中で、どないしようもないような苦情を訴えにきた市民の相手と言うのは通常業務の範疇はんちゆうだった。もつとも今回に限ってはその訴えの状況そのものが通常とは言い難いものだったが。

「芝君、いいよ。この人たちを今追及しても事態はもう変わらないんだから」

館山はぐったりしたような面持ちで芝をなだめた。

「君達の行動は処罰の対象に値するとは思うがね、お陰で各部署ともに早急に動かなければならなくなった。お役所仕事とは思えないスピードだね」

やや自虐的な笑いをこぼす。

「どこも今必死で報告書をまとめているよ。明日の朝、早速緊急会議を行う。君達も参加しなさい。いいね、遅刻は許さないよ」

「はあい」

担任の先生に怒られている生徒のような愁傷な返事だった。

## 2

翌朝八時というかなり早い時間に市役所職員全員が登庁し、その多くが大会議室に集まった。入りきれない職員はそれぞれの部署で今からなにが始まるのだろうと落ち着かぬ面持ちで待つていた。どないしよう課の三人は大会議室の一番前に座らされていた。

「こんな前、いやや」。寝られへんやん」  
華子はかなり不機嫌だった。

「寝たら困るから前にされてんやろ」

拓郎は溜息をついた。

「そんなん学校やあるまいし。まるで私ら問題児みたいやんか」

「いや、問題児やろ、充分」

全く自覚がないというのもある意味凄い才能かもしれない。こういう性格が時々うらやましい拓郎であった。自分もこれくらい能天気なら、もうちょっとと楽しく生きられるだろうに……。ちょっとやっかみながら、拓郎は華子に説教を垂れた。

「だいたいアンタ、起きとつても人の話聞いてへんやん。金魚みたいに目開けて寝てるんやろ」

「やかましいわ。そういう拓郎くんは何よ。人の話一生懸命聞いてるふりして、実は余計な妄想膨らませて、いっつも一人で涙目になってるやんか。このむっつりスケベ！アホやで、アホ」

「言わせておけば」

拓郎はむかつきながら華子を睨んだ。華子も負けじと身を乗り出し鼻を膨らませる。

拓郎と華子が漫才をしているその横で広瀬は腕組みをしながら、既に居眠りをこいている。時々ガクツと後ろに頭が倒れ、かばつと口を開ける。

マイクの調整をしている危機管理室の芝が呪い殺しそうな目つきで三人を睨みつけた。

「あ、鬼瓦が睨んでる」

拓郎は芝の視線に気付いて、慌てて姿勢を正した。華子が鼻先でそんな拓郎をあざ笑う。

「そろそろ始めますか」

芝は気を取り直したように全体を見回した。

「早い時間に召集をかけてすみません。危機管理の芝です。それでは緊急総会を始めます」  
なんとなくざわついていていた会場は水を打ったように静まり返った。

「昨日のテレビをご覧になった方も多いと思いますが、道頓堀が昨日から大騒ぎになっています。例の原油流出の事実がマスコミに漏れまして、あの様な事態になりました」

芝が意味ありげな視線を三人に送った。拓郎は思わず下を向き、華子はにかつと笑って手まで振ってみせる。広瀬は上を向いて爆睡中だ。芝のこめかみに血管が浮くのが見えた。芝は深呼吸をして怒りをこらえる。

「情報を漏らしたのが誰か、その追及はさておき……。全国ニュースでも取り上げられ、あつと言う間に世間に知れ渡るところとなつてしまいました。昨日の夕方から、マスコミ各社、市民、府庁、果ては永田町から問い合わせの電話がひっきりなしにかかってきている状況です。一昨日は当面の方針が決定するまでは極秘という事になっておりましたが、悠長な事を言ってる場合でなくなりまして、早急な対処を迫られる事となりました。では、市長」

芝は館山にマイクを渡した。館山はゆっくりと立ち上がった。

「皆さん、おはようございます」

館山のあいさつにざわざわと返事をする声が響く。

「昨日の状況については芝君がお話しした通りです。で、昨日の夜、各部署の責任者に集まっていただき今後の方針について討議致しました」

館山は少し間を空け、会議場をぐるっと見回した。いつも愛想笑いを浮かべている館山にしては珍しい程、真剣な表情だ。

「不肖館山修、大阪市再生をスローガンに市長の席について早二期目。この間、『館山は何をして来たんや』と揶揄やぶゆされている事は存じております。また、こんな私のために職員の方々が懸命に公務に取り組んでこられた事を心から感謝しております」

館山は涙をこらえるように上を向いて唇をきゅうううとと噛み締めた。会場からも微かすかなすり泣きが聞こえ、妙にしんみりした空気が流れる。

館山は胸ポケットからハンカチを取り出すと、目元を拭った。

「……ごめんなさい、つい」

そしておもむろに顔を上げるともう一度会場を見回した。

「ふがいない一期目を挽回すべく、この非常事態を収束させ、またこれを大阪にとつて逆転満塁ホームランとすべく最大限に活用するという使命に全力を尽くす所存でございます。皆さん！ この館山修を、どうか男にしてください！」

館山の目にぎらぎらとした光が宿り、頭が紅潮する。館山はハウリングするような大きな声で高らかに宣言した。

「大阪再生プロジェクト・道頓堀油田開発計画をここに発動いたします！」

キイイイイン……。残響音が会場に響き渡る。一瞬時間が止まったような空白の後、どどどどと会場が沸き立った。

「道頓堀油田やて？」

「油田を掘る？」

あちこちで油田という言葉が飛び交い、隣の席の人の声聞き取れない程の騒がしさに包まれた。

「静粛に！ 静粛に！」

しばらくして芝のどすの利いた声が響き渡り、会議場は少しずつ落ち着きを取り戻し始める。それでも完全に静かになるのに五分近くかかった。芝は頃合いを見計らい、マイクを別の男に渡した。背の高い細身の男前だ。

「企画課の沢木です。え、本日午後三時より、中会議室でマスコミ各社を呼んでの記者会見を行います。市長と芝さん、都市整備の岸本さん、それと近畿中央大学の地質学部准教授の太田仁先生、そして私が出席致します。それと今後の対応ですが、道頓堀油田に関する問い合わせは企画課の『道頓堀油田開発プロジェクト』で一括して対応しますので、どのような問い合わせが来ても各部署レベルでは一切答えず、全てそちらへ回してくだ

「さい」

マイクが再び館山に回った。興奮した面持ちで叫ぶ。

「皆さん、これからが正念場です。気合入れて、フンドシを締め直して、襟を正して、必死のパッチで頑張ってくださいましょう！」

そして左手でコブシを作るとたかだかと突き上げた。

「石油を掘るどおおおおお！」

おおおおお！

会場からどよめきと歓声が上がった。

「石油を掘るどおおおお！」

館山の檄に呼応して、皆が立ち上がりコブシを振り上げる。

「石油を、掘るどおおおお！~~~~~！」

いつしかどよめきはシユプレヒコールとなり、中之島に響き渡っていった。

「えらい事になりましたね」

拓郎は自分のデスクにつくと腕組みをして背もたれに背中を押し付けた。先ほどの会議場の熱気を思い返すと、なにやら恐ろしいような気がする。

「道頓堀油田開発計画ですよ。ホンマにそんな壮大な計画、動くんですかね。油田を掘ってですよ、そのうちなんかえげつないモンが一緒に出てきたり、ずどど〜んっと大阪全部

が地盤沈下したり……。ああ、怖、サブイボ立つわ」

拓郎の頭の中に暴れるゴジラの映像と日本沈没の文字が交互に浮かんで消えていく。

「また拓郎くんの妄想癖が始まったわ」

華子が莫迦にしたように口を挟んだ。

「こういう計画をなんちゅうか知っているか？」

広瀬はパソコンの画面を覗きながら興味なさそうに言う。

「大風呂敷っちゅうんや」

一刀両断、袈裟懸けにパツサリと言ったところだろうか。

「そんな身もフタもない言い方……」

拓郎はフォロワーしながらも、少し苦笑いした。自分もそんな風に感じていたからだ。どうせ拓郎たちは蚊帳の外だろう。前代未聞の壮大なプロジェクトではあるが、どないしよう課には関係のない世界の話だ。

「そう言えば、昨日の夜、課長レベルが集まって会議って言っていましたけど、課長行ったんですか？」

「ああ、行ったよ。市役所出て、地下鉄乗ろうと思たら電話かかってきたんや。めっちゃ腹空いとったのに」

いかにも面倒くさそうな口調だ。広瀬にとっては石油騒動よりも夕食の心配の方が深刻だったようだ。

「じゃあ知ってたんですね。今日の話の内容」

「おお。一応な」

拓郎は少し身を乗り出した。

「各部署の対応って言ってたじゃないですか。うちはどうなんですか。少しは関わる事になるんですか」

広瀬はパソコンから目を離すと拓郎を見た。

「なんや、拓郎くん。えらい興味津々やないですか」

「そりやそうでしょう。市役所全体が一丸となつて突き進みますよ？ 少しくらいはお手伝いせんとまづいでしよう」

「あゝ、ホンマに君は真面目だね〜」

広瀬は大げさに感心して見せた。

「お仕事、あるよ。道頓堀油田を掘る土方の手伝いや」

「ええええ？」

思わず叫ぶ拓郎と華子を見て、広瀬はけけっと笑った。

「嘘や嘘。そんな訳ないやろ」

「ああ、びっくりした」

二人はほっとした。

「いい加減にしてくださいよ。課長が言うとお洒落にならんわ」

広瀬は両足を机の上にとんと乗せると、両腕を頭の後ろで組んだ。にやりと不敵な笑いを浮かべる。

「いやいや、ちゃあんとお仕事もろたで〜。俺らは道頓堀商店街に出向や」

「道頓堀商店街に出向？」

拓郎と華子は顔を見合わせた。

「そ。道頓堀に油田を掘るんやで。そら、地元住民の皆さんの多大なご協力を仰がなアアンやろ」

「はあ、そらそうですねえ」

「地元住民の皆様の日々の生活を事細かにサポートする。それが俺らのお仕事や」

「はあ」

「俺らのために新しい分室を道頓堀に用意してくれるそうや」

「はあ？」

「たこつぼの二階が俺らの新しい部屋やて」

「はあああ？」

「課長、意味がわからへんのですけど？」

「ちっちゃ。君達、鈍いねえ」

広瀬は顔をしかめて右手の人差し指を左右に振った。

「要するに『お前ら邪魔やから出て行け。市役所の中に居おつたら、また情報をリークする

やろうから、とつとと失せろ』ってこつちやな」

拓郎の口がカクンと開いた。

「それって、平たく言えば島流しって事？」

「そ。平たく言えば島流しって事。噛み砕いて言えば厄介払いって事。ついでに言えば帰ってくんって事」

「わあああああ」

拓郎は思わず頭を抱えて机に突っ伏した。

「八丈島から沖ノ鳥島に遠島されたあああああ」

「君い、道頓堀商店街の皆様は失礼やぞ！ 八丈島から沖縄本島に流されたんや」

訳のわからない例えである。

「ええやないか。オモロイやないか。同じやるなら市民の皆様と一緒にいる方が面白いってモンやろ。一応給料も出るねんし」

「道頓堀油田かあ。どうなんねんやろ。ああ、なんか楽しみ」

机にめり込んで身悶えしている拓郎とは対照的に華子はうっとりとしていた。

「油田、油田、油田。ああ、おなかへって来た。おでんでも食べに行きましょか」

「なんでそこで油田がおでんになんねんつつ！ お前は食い気ばかりか！ この欠食児童がああ！！」

拓郎が叫ぶ。原油の黒い汁に浸ったおでんを想像し、拓郎は思わずえずいた。

「おお、そうやな。さっそく引越し準備せなアカンし。これから道頓堀行って、下見して、ついでにおでんでも食おか」

広瀬は勢いよく立ち上がると足取りも軽やかに扉の方へ歩き出し、華子もバッグを持つと嬉しそうに立ち上がった。

「拓郎くん、ほら行くよ！」

「あううううううう」

半分死体になっている拓郎の腕を取り無理やり立たせると、そのままずるずると引きずるようにして広瀬の後に続いた。

道頓堀は相変わらずの騒ぎである。デイズニールランドの人気アトラクション並みの人混みを三人は掻き分け掻き分けしながら、ようやくたこつぽに辿り着いた。

扉を開けると、狭い店の中はお客で満員だ。行列に並び飽きた客が列から離れ、道頓堀に居並ぶ飲食店で休憩しているのだろう。どの客もぐったりと疲れた顔をしている。

やすえの一人娘の弥生がたこ焼きの入った皿を持って、右へ左へと飛び回っていた。弥生はまだ中学生だが、やすえよりも既に背が高かった。ぽつちやりしてる母よりも若干細いが、顔立ちはよく似ている。

「あ、どないしよう課の……」

入口で空いた席を探していた三人を見つけると、厨房に向かって叫んだ。

「お母さん！ 来はったよー！」  
奥の厨房からやすえが出てきた。

「ああ、三人さん！ いらっしやうい」

まるでどこぞの新婚さん番組のようだ。思わず拓郎はぶっと噴き出した。

「あく、今席満員やから、二階で待っててくれる？」

やすえは店の奥を指差した。どうやらそこに階段があるらしい。

「今、この通りで、手離されへんから。ごめんやで」

「いえいえ。じゃ、遠慮なく」

広瀬はへらへらと笑いながら奥へと進んでいく。華子は通りすがりに弥生とハイタッチすると、堂々と後に続いて行く。拓郎は小さくなってココソコと最後尾をついていく。何故二人がこれほど堂々としていられるのか、どうも理解出来ない。まるで自分の家だ。

隠し階段のような狭くて急な階段を上がる。体重をかける度に、ぎゅうっと低い音を立てながら蹴上がりの板がきしむ。いかにも古いですといわんばかりだ。

たこつぼの二階は縦長の和室になっていた。部屋の奥には座卓が三つ、積み重ねて置かれており、その手前には座布団が十枚程積まれていた。どうやら一応お座敷対応にもなっているらしい。

「おい、拓郎。そっち持ってくれ」

広瀬は早速、座卓を一つ下ろそうとしている。拓郎は慌てて座卓の縁を持った。

「エエんですか？ 勝手に触って」

「何ゆうてんねん。ここがわしらのオフィスになるんやで？ 自分らでせんでどうすんねん。大家の手を煩わせるんか？」

「……」

なんとなく騙されているような気もするが、道理と言えばそのような気もする。拓郎は首をかしげながらも、仕方なく広瀬の手伝いをした。

座卓を並べて座布団をその周囲に置くと、がらんとした部屋がちょっとした宴会部屋に変身した。

「ええやんか、ええやんか」

華子は嬉しそうに拍手する。

「そや、後で招き猫と福助とビリケンさん、持ってこなアカンわ」

「おお、そやな。引越し荷物はそのんなに仰山ないから、拓郎、お前の自転車にリヤカーでもくっつけて運ばか」

「やめてくださいよ！ 僕の自転車でリヤカー引かんといてください！」

拓郎は悲鳴を上げる。拓郎は自転車好きで、出勤にも使っている。今の愛車は某有名メーカーのマウンテンバイクで、購入の際には結構な額だった。日傘をハンドルにくっつけて走っているその辺のオバ・チャリとは違うのだ。そんなものでリヤカーを引くなど<sup>もって</sup>以ての外である。

「そんな事するくらいなら、電車で往復しますっつっ！」

「ちえっ、拓郎のケチ」

広瀬は口を尖らせて拗ねた。

「オッサンが拗ねても可愛くもなんともない。ダメですよ！」

拓郎の言葉に、隣の華子がビクリと反応する。

「拓郎くんのケチ」

華子も唇を尖らせて拗ねてみせる。ついでに白々しい瞬き付きだ。

「肉まんが拗ねても可愛くない！ アカンもんはアカン！」

「誰が肉まんや！」

華子が手の甲で拓郎の胸を勢いよく叩いた。どすつと結構な衝撃がして、拓郎はげほと咳をした。

「お待たせしてごめんねえ」

その時、賑やかな声と共にやすえが上がつて来た。手にはたこ焼きとお茶の乗った盆。

「いやあ、机出させてしても、ごめんね」

「いやいや、間借りさせてもらうんですから。これくらいはせんと罰が当たるっちゅうもんですわ」

広瀬にしては珍しくまっとうなセリフである。やすえはにこやかに笑いながら、三人の前に盆を置いた。

「たこ焼き屋やから、たこ焼きしかないで」

「小路さん、おでん屋さんってあります？」

「おでん？ ああ、三軒隣にあるわ」

華子はどうしてもおでんが食べたいらしい。

「じゃあけど、びっくりしたわ。ゆうべ、広瀬さんから電話貰った時には」

やすえはお茶を三人に配った。

「は？」

拓郎は広瀬を見た。当の本人はしら～つとした表情で早速お茶をすすっている。

「……課長が電話したんですか？」

「そっや」

「あのお、もしかしてとは思うけど。僕らの出向って、追い出されたんですよね？」

「まあ、結果的には引き止められへんかったからな。そういう事やろ」

「引き止められへんかったって……。ええええ？ ちょっと待っててくださいよ」

拓郎は素っ頓狂な声を上げた。

「か、課長？ まさか、自分から出向するって言うたんですか！ ちょっと！ えええ？」

拓郎は思わずのけぞった。何故そんな事を言い出すのかさっぱり理解できない。元々理解できないオッサンだが、何を血迷ったのか自ら島流しを願ひ出るとは。

「どういふこと？」

華子はきょんとんとして広瀬と拓郎とを交互に見比べている。

広瀬は相変わらず我関せずの涼しい顔だった。

「拓郎よ、よう考えろや。あんな役所の中に居てもしゃあないやろ。これからあの大風呂敷に付き合わされるんやで？ それも、あのせこい丁見の連中の考えるような大風呂敷や。どないなモンかわかるかいな。そんなモン、ろくなモンやないわい。しゃあけどやな、同じ付き合わされるんなら、損はしとない。出来たら儲けたいやないか。それは公務員だけやない、大阪に住むモン全員の思いや。そのためにはあんなせこましい、モグラみたいなトコに居って、ろくでもない雑用してるよりは出た方がオモロイに決まってるやろ。風呂敷の模様を眺めようと思つたら、風呂敷の中に突っ立っつてもなんも見えんわい」

「……」

拓郎は哑然として広瀬を見つめた。

「なんか、物凄くマトモな事、言ってます？ もしかして」

「当たり前や。失礼やで、君」

広瀬はいつものへらへらした調子で答えた。

「お、それよりも腹ごしらえや。それが終わつたら引越しの算段せんとな。三時から記者会見もあるから、見なあかんやろ？ 館山のオッサンの冷汗かくとこ、見ものやぞ。

早いこと色々片付けなあかんわ。公用車借りなあかんわ。おい、拓郎、携帯や、携帯」

「あ？ あ、はい」

拓郎は慌ててズボンのポケットに突っ込んであつた携帯電話を取り出して広瀬に手渡し  
てから、はっと気がついた。

「何で僕のなんですか……。自分の使つて下さいよ！」

「俺のは充電が切れかかっているから。ええやんけ、セコい事言うなよ」

「どっちがセコいんですかっつ！」

毎朝放送アウンサー室に市役所からのファックスが届いたのは九時過ぎだった。業務開始と同時に市役所広報から送信されてきたようだ。そこには『道頓堀石油流出についての記者会見のお知らせ』と書かれてあつた。

「麻生ちゃん、市役所で記者会見があるよ。行く？」

自分のデスクで道頓堀騒動のリポートを書いていた麻生直美はディレクターの柏原から声をかけられ、思わず飛び上がった。

「はい！ 勿論です！ 行きます！」

物凄い勢いで柏原の前へ移動し、机に手をつくと身を乗り出した。直美の勢いに柏原はたじろぐ。

「あ、そ、そう？ でもさ、昨日も道頓堀だったし、疲れてるんじゃない？ 夜、収録もあるし」

「大丈夫です！ ドリンク剤、ケース買いますから！」

可愛らしい顔からは想像もつかないような鼻息の荒さである。

「柏原さん、報道に行きたいんです！ 前から言ってますけど、私、報道が好きなんです！ ぜひ、ぜひ、私に行かせてください！ お願ひします！」

「ま、まあ、君が体力的に大丈夫なら、いいんだけどさ」

柏原は苦笑いを浮かべると、手元のファックス用紙を直美に渡した。

「これ、さつき市役所から届いてたヤツ。じゃ、頼むよ」

「はい！」

直美はファックス用紙を手にとると小躍りしながら自分のデスクに戻った。わくわくしながら目を通す。

「三時からか。よし」

直美は一つ頷いた。

「麻生、いよいよ念願の報道へ進出？」

先輩の女子アナである水野が声をかけてきた。

「ええ！ やつとチャンスが回ってきました、先輩！」

「良かったじゃない。貴女、ずっと報道志望だったもんね」

新人の頃から直美を気にかけてくれていた先輩だけに、本人の意に反してバラエティー系で仕事が増えていくことを心配していてくれたようだ。

「でもこれでコケたら、一生バラエティーよ。頑張んなさいね」

「はい！」

水野は直美の肩をポンと一つ叩いて、その場を去った。直美は両手で自分の頬つぺたを叩いた。これからが正念場だ。

直美とテレビクルーは昼過ぎには市役所に辿り着いた。既に市役所玄関周辺には大勢のマスコミが駆けつけている。市役所の広報の職員が、集まった報道陣の確認を始めていた。時々喧嘩のような怒声が聞こえてくる。どうやら市役所が連絡していない三流紙やゴシップ誌のフリーライターなどは入れないようになっていらいらしているらしい。

「さすがにたくさん集まりましたね」

カメラマンが直美に話しかけてくる。

「そりゃそうでしょう。道頓堀から石油が湧いてるなんて前代未聞だもの。お役所がどんな対処をするのか、誰だって興味が湧くつものよ」

そう、恐らく日本中が注目しているはずだ。そしてそのニュースを報道するという使命に直美は身体が震えるほど興奮していた。

「それでは中にご案内致します。皆さんにお願いがあります。庁舎内には市民の皆様が大勢こられておりますので、どうぞ混乱を招かないよう静粛かつ迅速に移動をお願い致します。また、庁舎内での取材は固くお断り致します。撮影も禁止です。職員や市民の皆さんへの取材を庁舎内で行った方がおられましたら、即退場していただきますので、ご了承下

さい。では、こちらへどうぞ」

広報の声が響き、報道陣は職員通用口から庁舎内へと移動し始めた。

市長室では館山が記者会見用の資料を読み返していた。昨日の夜から関係者が徹夜でまとめ上げた資料だ。一晩で作成されたとは思われないような分厚さである。それだけ各部署の情熱がこもっているというものだ。何度も読み返してしっかりと内容を把握しておかなければならない。

市長に就任してから記者会見なんぞ数え切れない程経験してきた。そのほとんどが頭を深々と下げて謝罪をするような内容ばかりだった。自分のせいではないのに、これまでのふがいない市長や市の幹部どもが作った負の遺産の尻拭いばかりだと言うのに、なんで自分がこんなに謝り続けなければならないのか。緊張よりもやりきれない憤りで身体が震えるような記者会見ばかりだったのだ。

しかし、今回ばかりは事情が違う。これほど緊張する記者会見は今まで経験した事がない。大阪再生プロジェクト・道頓堀油田開発計画。これは大博打だ。吉と出るか、凶と出るか。その結果は神のみぞ知る、といったところか。いや、なんとしても吉としなければならぬ。そのためには前進あるのみだ。間違はなく、館山修、一世一代の大舞台だった。

館山は額に滲む汗をハンカチで拭った。記者会見が始まる前からこの汗だ。本番になったらバスタオルが必要になるかもしれない。そんな事を考えてみたが、緊張はほぐれそ

になかった。

ノックの音がして扉が開いた。企画課の沢木が入ってくる。

「市長、記者会見の用意が整いました」

「うむ」

館山は老眼鏡を外すと胸ポケットに納め、資料を手にするとゆっくり立ち上がった。

「いざ、出陣じゃー！」

中会議室は既にたくさんのカメラと記者達で埋め尽くされていた。騒がしいという訳ではないが、ざわざわした落ち着かない空気が部屋の中を満たしている。

部屋の前の扉が開き、そろそろと館山を先頭に市役所関係者が姿を現した。ガシヤガシヤと耳障りなカメラの音と、白いフラッシュが無数に弾ける。

部屋の前に設置された横長の机に館山、危機管理の芝、都市整備の岸本、近畿中央大学の太田が座り、企画課の沢木が会見用のマイクの置かれてある台の前に立った。

「時間になりましたので、そろそろ始めさせていただきます。企画課の沢木と申します」  
 端正な容姿の沢木が軽く会釈すると、それを合図のようにまたシャッター音とフラッシュが激しくなる。

「記者会見は一時間とさせていただきます。質問は一通りの状況説明が終わりましたらまとめて受け付けますので、ご了承下さい」

沢木は落ち着いた声で会見についての説明を行いながら、時々カメラへと視線を送った。「それではまず近畿中央大学地質学部准教授太田仁先生です」  
 マイクが沢木から太田に渡された。太田はおずおずと立ち上がった。小柄でぼつちやりした太田はまだ三十年代後半という事だった。  
 「えー、ご紹介に与りました太田です。まずは、道頓堀から湧いている物質について説明いたします」

太田は壁際に立っている職員に目配せをした。職員は照明のスイッチに手を伸ばす。会議室の前半分の照明が消えた。

太田が手元のパソコンを操作し、会議室の前の壁に化学記号と数字で埋め尽くされた表が現れた。

「これは現在道頓堀から流出している液体を採取し、分析した結果です。説明しだせばキリがないので、ざっと行きたいと思います。ご覧の通り、主成分は炭素、これで八割以上を占めています。残りは水素、硫黄、その他の元素で構成されています。これらの成分とその割合を見まして、間違いなく道頓堀から出てきたのは原油であります。油なので密度は水よりも軽いです、約0・85という数値になっています。これは特徴的です。原油の性状には三種類ありまして、密度で分類されています。0・85という数値は軽質油に分類されます。特徴は沸点の低い成分が多く、常圧蒸留時に軽油、灯油、ガソリン、ナフサ、石油ガスが多く得られます。アスファルトや重油と言った成分が比較的少ないという事で

す。軽質油は世界的にもあまり多くありません。日本ではかつて静岡県の相良油田（あがら）で採掘されてきました。相良の原油ほどではありませんが、かなり貴重な、良質の原油と言いう事ですね」  
 専門的な話で部屋のアチコチから溜息にも似たうめき声が聞こえてくる。席に着きながら一生懸命メモをとっていた直美にとってもちんぷんかんぷんだ。だいたい日本で原油を採掘しているという話すらほとんど知らなかった。

太田はパソコンを操作した。前に映っている画像が切り替わる。今度は地層の絵が出てきた。

「えー、では何故道頓堀くん dari から、原油が流出したのか。そもそも原油と言うのは深さが数メートルという地層の隙間、孔隙（こうげき）と言いますが、そこに存在しています。地下では原油やガスや水やら混在しているのですが、水に比べ原油やガスは比重が軽い。そのため地中の孔隙を通過して浅いところへと移動していきます。そして、ガスや油が貯まりやすいトラップと呼ばれる地質構造の場所に集まるのです。よくあるのが、お椀を伏せたような低浸透性の地層。その下に貯まって、長い時間保存される事になる」

画像の中で通天閣の形をした矢印が地層の絵の中を行ったり来たりして、太田の話の補足を手伝っている。

「これはまだ推測の話ですが、恐らく道頓堀の地下深くにこのような構造の地層が存在していたのであろうと思われます。そして、先日の夜中に起こりましたあの地震。あれが引き金になったのであります。地震によって蓋の役割をしていた帽岩が破壊された。地下数